

た か す わ じゅう えにし
高須輪中の縁

細野 哲弘 (前 特許庁長官)

岐阜は「木の国、山の国」である。そしてその必然として清流に恵まれた「水の国」でもある。飛騨と呼ばれる北アルプスや白山山系を擁する地域に源を発する沢山の川は、合流を重ねながら美濃・尾張の平坦部(濃尾平野)を耕し、多くの恵みを添えて伊勢湾に注ぎ込んでいる。県域に海はないけれど、海の自然は山と川が支えているという気概がある。平成22年の6月に内陸県として初めて「全国豊かな海づくり大会」が両陛下をお迎えして開催された所以である。折から、今年は『清流国体』と銘打った国民体育大会の開催地でもある。

しかし、それは此处での主題ではない。その伊勢湾に近い岐阜県の最南部のところに、木曾川、長良川、揖斐川にはさまれる高須輪中がある。輪中とは、堆積による嵩上げされた川底よりも低い丈の市街地を水から守るため、その周囲をぐるりと堤で囲んだ土地のことである。高須輪中はその一つである。

このあたりは、今は町村合併を経て海津市の一部をなしているが、明治の版籍奉還以前は高須藩といい、その起源は慶長年間にまで遡る。その折高須城主が関が原合戦で西軍に与した高木盛兼であったため、その後は東軍の武将又は代官が続べなうようになり、ようやく元禄13年(1700年)になって尾張徳川家連枝の松平氏の所領するところとなった。初代は松平義行である。その領地は石高こそ数万石にとどまったが、幕府によって直接安堵されたものであり、決して尾張藩の分知・支藩ではない。しかし、経緯的にも

地理的にも尾張藩との関係は深く、一朝尾張宗家の嗣子に支障が生ずれば相続・輔弼の任に当たることも少なくなかった。小藩ながら格式は高く、江戸城大広間詰、葵の御紋の使用も許されていた。

先ほど河川の恵みと言った。しかし、自然はいつもやさしくはない。三つの勢いのある河川にはさまれるという地勢と徳川時代の権力事情は、この地に宿命的な襲を織りなしている。これは「縁(えにし)」と言うべきものである。近時、絆という言葉をよく耳にするが、これには能動的な意志、つまり選択的志向性を感じる。縁(えにし)は違う。地縁、血縁と言うように、これには選択性はない。与えられた運命(さだめ)の響きがある。

さて、高須輪中^{たかすわじゅう}にまつわる縁(えにし)についてである。木曾川、長良川、揖斐川の三川が集中するという地理もさることながら、隣国が親藩尾張藩であるという事情により、高須側の堤は尾張側のそれ(「御圍堤」と称した)より3尺(約90センチ)低く作るのを定めとされたから堪らない。江戸時代のこの地域の洪水は悉く美濃の高須側に生じた。この三川は時代によって遷り変わりはあるが、海に注ぐ前に一つになっており、ひとたび洪水となればこの地方の被害は甚大であった。さすがに幕府もこの地域の民の度重なる苦難は無視できず、これを三つに分流させるための大工事をするとし、その実施を九州薩摩藩に命じた。宝暦3年(1753年)のことである。この時期の幕府と地方



三川と高須輪中(写真提供:海津市)



三川分流碑(写真提供:海津市)



有力大名との力関係にはなお微妙なものがあり、西軍に与した九州雄藩である薩摩の勢力は侮りがたく、この治水工事の実施（これを「御手伝普請」といい、費用は命じられた方の負担であった）によりその財力を殺ぐという意図が背景にあったのは、想像に難くない。

「宝暦の治水」と呼ばれるこの工事は難渋を極め、薩摩藩に30万両とも40万両ともいわれる莫大な負担を強い、またゆかりのない地での工事にまつわる村人や幕府役人との様々な確執・軋轢を生んで、1755年に工事が完成するまでに80余命の薩摩藩士が切腹、病気、事故などで落命。総指揮を執った家老の平田鞆負も国許への工事の最終報告書面をしたためた翌日、すべての責任を取って自刃した。

「住みなれし 里も今更 名残にて 立ちぞわずろう 美濃の大牧」が辞世の句である。工事によって出来た堤の一つ

である油島の堤には、薩摩藩士が故郷から取り寄せた松が植えられており、千本松原としてその名残をとどめている。そこに義士慰霊碑があり、筆者は幼い頃、その近くで蟹を獲って遊んだ記憶がある。故郷鹿児島市内にも平田鞆負の像を置く平田公園があり、毎年命日の5月25日には義士顕彰の慰霊祭が営まれる。



平田鞆負の像
(出典：鹿児島市ホームページ)

その苦難の経緯は、この工事を題材にした杉本苑子の「孤愁の岸」に詳しい。

この物語は昭和37年（1962年）の直木賞を受賞し、彼女の名を一躍世に出すことになったが、この史実は美濃では、広く人口に膾炙されていた。この地に育った者は、小学校の副読本や夏休みのドリル中に必ずと言っていいほど登場したこの物語に接したはずである。この縁により、岐阜県と鹿児島県は姉妹県となっており、まだ集団就職というのがあった頃には、繊維で栄えた岐阜への鹿児島からの集団就職列車は、岐阜市長が駅頭に出迎えるのを常とした。

時代は下って、弘化3年（1846年）陸奥会津藩の9代目の家督を松平容保が継いだ。言わずと知れたのちに京都守護職として幕末の政局で重要な役割を果たす人物である。この容保が美濃高須藩の出身であることは意外に知られていない。実は、会津8代目の当主容敬も高須松平家の出であり、容保は容敬の甥に当たる。容保の兄弟には逸材が多

く、慶勝（尾張徳川家14代藩主）、茂徳（高須藩11代藩主、尾張徳川家15代藩主、一橋徳川家10代当主）、容保、定敬（伊勢桑名藩主）は、高須四兄弟として著名である。

幕府の屋台骨がギンギンと音を立てて軋み風雲急を告げる当時の状況下で、京都守護職という割に合わない責任を引き受けることには、藩内にも、彼自身にも相当の逡巡があったとしても不思議はない。彼自身は、もともと

と御三家という有力徳川一族でありながら江戸時代を通じてついに一度も将軍を輩出せず幕末には朝廷側に与した尾張藩との因縁が深く、ましてや小藩からの養子である。

しかし、今や彼は保科正之を祖とする会津松平家の当主である。その開祖の遺訓である「将軍家を守る会津藩たれ」の理念に殉じることを敢然として受け入れる。京都から鳥羽伏見の戦を経て奥羽越前藩同盟を背負っての会津戦争まで苦難の道を辿ることとなる。そこには、出自と時代の大きな流れの中での定めを感じる。

いま岐阜には会津との結びつきを示すものは決して多くない。しかし、岐阜の地の地元物産展などにさりげなく、しかし当たり前のように会津塗りのなどの工芸品が並ぶのは故のないことではない。

先に、縁（えにし）には選択性のない運命（さだめ）があるのみと言った。しかし、縁という字は「よすが」とも読む。「よすが」とは、先に想いを致すに当たり契機（きっかけ、ささえ）にするものである。

最近では、時代のせいなのか、教育のせいなのか、岐阜でも薩摩義士のことも高須出身の会津藩主のことも忘れられがちである*。しかし、今此処にある我々の存在は歴史という味わい深い過去の所産であり、未来への架け橋でもある。南シナ海、太平洋に臨み進取の気概と渡来の文物に格別の思いを抱いてきた鹿児島との結びつきや、未曾有の災害から不屈の精神で雄々しく立ち上がろうとしている東北・福島との繋がりを重ね合わせつつ、先人の足跡や思いを、今を生き未来に立ち向かうための縁（よすが）にしたものである。



京都守護職時代の松平容保
(出典：ウィキペディア（会津若松市所蔵品）)

*）筆者旧友の高橋一吉氏から、海津市油島に近い大江小学校をはじめ、同市内の小学校では現在も副読本を使って薩摩義士顕彰の教育を行っており、大垣JCは、薩摩義士の偉業を顕彰するため、40年にわたって大垣市と鹿児島市の中学生交換事業を行っていること、また海津市の歴史民俗資料館では、高須藩にまつわる諸々の事物紹介がなされていることなど嬉しくなる教示を頂きました。さらに、同氏を仲介して海津市副市長の後藤昌司氏から三川分流に関する写真を頂戴しました。衷心より感謝申し上げます。付言させていただきます。